

R. Queneau の ≪Zazie dans le metro≫ に

おける表現について

渡 辺 捨 男

Sur le langage de ≪Zazie dans le métro≫

(R. Queneau)

Per

Suteo WATANABE

さきごろ、慶応大学の白井教授が、世界文学全集の1冊として、Raymond Queneau (1903～)の比較的初期の小説2冊を翻訳出版された。その解説に Queneau の小説のうまさというか、どういう人物がよく描けているとか、そういったことがやや詳しく述べられているのだが、それを読んで私は、フランスの小説に関する限り、近来珍しい批評に接したと思った。というのは、ちかごろのフランスの小説は、一般的には、20年前のそれとは全く変貌してしまって、こうした伝統的な、平明な批評を失得る小説は、実はひじょうに少いからである。Queneau においてもその例外ではなく、彼の小説の多くは、こうした批評の余地をほとんど残さないほど、バルザック的な、平明な「ストーリー」とは無縁のものになっている。彼の小説の中でも、唯だ初期のものや、その他少数のものだけか、やや伝統的小説に近い構成をとっているというまでである。近来4冊ほど出た Queneau に関する研究書(本稿末尾にその書名を載せた)にも、こうした伝統的な立場よりする批評は、ほとんど見かけないように思われ、その意味で、白井教授がやや初期の小説についてとはいえ、こうした今日では珍しい内容をもった批評をされていることは大へん面白いと思うのである。

もともと Queneau は、在来の型の小説手法を駆使することにも、優れた才能をもつ作家であると、私は信じている。その意味でも、私は白井教授の見方なり、批評なりを是認したいのだが、フランスで、彼の小説に対する批判なり、論議なりは、実は別の軸を中心として回転しているのだ。それは彼のコトバや、文体についての異常なまでの執念、自分でひとつの「綴字法」をもつ別のコトバの体系をもとうとする、通常考えられないほどのコトバへの執念に対して、いつも論議が集中するものである。

ところで、あまりにもそういう執念が強いということは、平凡にあって、作家として彼の長所でもあり、短所でもあろう。François Mauriac が Queneau を、「この学者、このコトバの錬金術師!」と近頃あるもの書いているが、前後の文から推してこれは悪口であろう。併し、とにかく Queneau は、文体にも執念をもっているか、それよりは一つ一つのコトバへの執念が強く、特に自分だけの「綴字法」(l'orthographe)で、コトバを、そして文を書くという点何とも独特である。

彼が1959年発表した ≪Zazie dans le métro≫ という小説は、40年の夏に出版した ≪Fleurs Bleues≫ という小説を除けば彼の最新の小説なのだから、この小説では、今いった彼だけの綴字

法による表現か、その他の、やはり彼ごのみの表現と共に、今迄の作品に比し、かなり数多く、かつ、かなり大胆に用いられている。

私は、いつか、彼のこうした特殊な表現手法についてふれてみたいと考えていたところ、ここに予期しないことが起った。Besançon 大学の音声学の教授である Pierre Léon 教授が、この小説のそうした特殊な表現手法の分析を内容とするひとつの論文（論文名は最後の資料の欄にある）を同大学の語学機関誌 *Linguistique Appliquée* の1963年号に発表したことである。

この論文は、小説発表後間もなく書かれたものか、あとになって同誌に載せられたものなのだが、語学や音声学の専門家が、新刊の小説について、語学上の論文を発表することはあまり例のないことと思われる。こういうことの起ったのも、Queneau の独自の綴字法による表現手法などか、永らく同教授の注意をひいていたこと、そしてこの小説が人気をあつめたこと、特に教授の興味をひく大胆な表現がこの小説で、今までに比べると数多く用いられていることに基づくものと思われる。それで、ここでは、教授のこの論文を参照しつつ Queneau の表現の特異性を述べたいのだが、その前に私自体のみた Queneau の表現の基礎になった考え方について一言述べてみたい。

元来 Queneau という作家は、コトハの「綴り」というものは固定したものでない筈だという考えをとっている。彼によれば現在の綴字を身動きのならぬほど固着したのは民衆ではなくて、文法学者であり、辞書づくりの人達である。ラテン語から崩れてきたころの中世末期のフランス語、または Ronsard のころの仏語の綴り字のゆるやかなのは勿論のことだが、そこまで遡らなくとも Corneille にしても相当幅のある綴り字を用いているではないか、コトハの綴り字はもっと柔軟であってよい筈だという考え方、これが彼の考え方の第一点である。（*malleabilité des mots*「言葉の可鍛性」と彼はうまいことをいっている。）

現在の段階においては、フランス語の話しコトハというものが、文で書かれるコトハと大分離れてしまっているのだから、文を書くのにもこの書きコトハというものは放棄してしまえばよい。平せい民衆の話している話しコトハそのものを文で書いてゆけばよいとする。ただ、この場合 Queneau は厳密な「文語」だけを書きコトハたとしているわけではない。例えば仏語で「私としては、その事を考える時間をもたない」と文には書くか、そういうことはふつう口では言わない。口でいえば「時間の問題だよ、わかるかい。そんな時間があるかい、僕に、その事を考えるのにね」という風にくだいて言ってしまう。だから、文でもそう書けばよいのだと Queneau は主張する。小説の場合でも、こういった話しコトハを小説の中でかなり多く、このんで用いた作家はある。しかし、こういう話しことば一本で、小説全体を書いた人は今まで、もちろんいなかった。L. F. Céline かはじめて、そういうコトハで長い小説 (*Le Voyage au bout de la nuit*, 1932) を書いたか、小説としてはその書き方でよいのだ。その小説は *«Ça a (1894—1962) ça. moi j'avais jamais rien dit. Rien. C'est Arthur Ganate qui m'a fait parler.»*（それは、そんな風に始った。僕は何もしゃべらなかつた。何もね、僕にしゃべらしたのはアルテュール・ガナーの仕業だ。）という句ではじまり、最後までこの話しコトハの口調かつづいているのだから、Queneau は小説はこの書き方でよいとするのである。要するに、小説を書く上においても話しコトハか書きコトハの地位にまで引上げられない理由なぞひとつもない。またそれを新しい文学、新しい詩のミナモトにして悪いという理由もないとする。かくして書きコトハとの比較において話しコトハを優位に立たすべきだということかそ

の第二点である。

次に Voltaire の言と称する「文を書くのは、口でいうことを画のようにかけばよい。口でいうのに似ていればいる程よいのだ」《L'écritune est la peinture de la voix. Plus elle est ressemblante mieux elle est.》という言葉を引いて、今いった話しコトバでも、特に発音に即した (phonétiquement) コトバの書きあらわし方がよいと主張する。この主張は、これだけでは具体性を欠くが、とにかくこれが第三点である。

以上の三点を総合して成立するのか、彼のいう発音に即した綴字法なので、彼自らこれを l'orthographe phonétique と名付けている。

ただ、もともと彼は作家なのだから、そう信ずれば、Céline のようにそれを小説で実践すれば足りるのだが、上記でも察しられるように、そうする前に、あるいは実践に伴って、いはばひとつの語学上の理論として、1937年、1955年に、以上のような所論を論文のような形で発表している事が彼の場合、特徴的だといえよう(これらの論文は彼の評論集 *Bâtons, chiffres et lettres* に集録されている)

そして、彼の主張の到達点として、彼の主唱するような新しいコトバは、口で言われ、(oral) 音楽的 (musical) である性質をもっているのだが、それがやがて詩のコトバとなり、新しい文学の素材 (substance) となるであろうと予測している。

大分前置きが永くなったが、Queneau の表現についてももう一面見逃せない面がある。それは適当に表現しにくいのが、コトバの遊戯の傾向である。Queneau は1925年から4・5年超現実主義 (surréalisme) 派に参加しているが、コトバというものに対する見つけ方からして、伝統的な小説作法によるそれにあきたらずして、かように surréalisme 派に走ったといえそうであり、またもう一つ、やはりその頃受た James Joyce の小説作法の影響も見逃せないと思う。作家のあいだの影響といったことには慎重な判断を要するのだが、Queneau の場合、あまり露骨に joyce の影響それが現われていて、特別その影響力は大きいようである。例えば一つのことを、いくつかの文体にかき分けるといった技巧に凝る傾向、これは1947年に出版された(《Exercices de style》に特に顕著にでている)。さらに駄じゃれとか、頭韻法、ラテン語や外国語とフランス語をつぎ合せた表現に凝って、その出来ばえを自ら楽しんでいるといった傾向、要するに文の内容からいえば、あまり意味のない文字の操作、一種のコトバの遊びに凝ってしまう傾向、これらはすべて joyce と共通の技法なのだが、私は断定はできぬにしても、現在のフランスで Queneau ほどこういった傾向のはげしい人はなからうと推定している。Léon 教授はこうした表現を「コトバの幻想」(fantaisie verbale) と名づけているが、そうした名にふさわしいものであろう。そして、さきの綴字法とこの fantaisie verbale との二つの組合せに Queneau の表現の特徴がある。

さて、いよいよ本論に入る。この小説は、思春期を前にした Zazie という女の子が、田舎から出てきて、パリで1・2日を叔父の家ですごす、その情景を描いたもので、すべて話しコトバ調で書かれ、ときには理性を超えた世界に踏み込むことがある。Léon 教授は、私の今述べたような Queneau の表現のミナモトといったことにはあまりふれず、専ら対象をこの小説にあらはれる特殊な綴字法と、今いった彼のコトバの遊戯とに絞って、それらの点を極めて具体的に説示している。この小説に先立つ約10冊の彼の小説も全く無視しているが、そのかわり、この小説に関する限り、彼の表現のテクニクの分析はなかなか詳細によくまとめており、勿論さきに引いた4冊の本よりも、この1冊の小説に関する限りでは比較にならぬほど所論も適

確のようであって、私としては解明される点も多かった。解らなかつた読み方を教えられたところもある。それで、ここでは、分類法は教授の分類法に従い、分析の骨子も教授のそれを取りつつ、そこに及ばず乍ら私見を述べ、次にフランスの文壇が、Queneau のこうした表現をどう見ているかということに私のしらべた範囲でひとこと触れ、最後に未熟なから卑見を述べてみたいと思う。

さて、Queneau の表現のうち、独自の綴字法を用いるテクニックを Léon 教授は次の三つに分け、そのうち *phénomènes phonétiques* だけをさらに三つに小分類している。

I 単純化 (Simplification)

これは一字一字の文字 (*lettre*) を他の文字に代えること (*transposition*) であるが、そのさいある程度字が短かくなり、コトバの単純化が行われるものである。

y の代りに i をつかう。 type→tip
est の代りに é をつかう。 que c'est→xé
cc の代りに k をつかう。 d'accord→dakor

といった類で、その例はひじょうに多い。併し、コトバの内容と関係のない、また発音も変わらないこんな書きかえに、表現としてどんな意味があるのか、誰でも考えて見たくなるであろう。Léon 教授は上述のとおり文字の短縮、単純化だとしているが、作家としてはむしろ視覚に訴えて何かおどけたような、または異様な要素を押し出さそうとするねらいの方が、単純化、短縮のねらいより強いのではないかと私は疑う。(たとえば *que* を *x* にかえる場合など)。

なお、こうした *simplification* などかたんなる文字の変形は、こっけいであろうとするねらいを持つのだろうか、ひじょうに容易な手法であるために濫用に陥りやすく、それがむやみに用いられると読者の方でうんざりしてくると Queneau について甚大な研究を発表した。A. Bergens も評しているが、その点私も同感である。ただし、こうした珍妙な綴字かいくつも並んできて、それがほかのやはり奇妙な文字と併せて、異様な効果を、したいに生んでくることは事実なのである。

II 音声現象 (Phénomènes Phonétiques)

これはコトバの音を、じっさいの発音どおり文字に書いてゆこうとするテクニックである。

i) 第一は同化現象 (*assimilation*) で、これは日常会話でふつうに行われている発音上での同化現象をそのまま文字にかいてゆく方法である。例えば *s* の音によって、有音の *z* の音が同化される結果 *je suis* が *chsuis* と発音されるのは日常ふつうのことであろうか、Queneau はそれを発音のまま *chsuis* と文にかいてゆく。発音「そのままを文字に書く」ということが中心である。*moman* (*maman*) や *pisque* (*puisque*) というのも同じ現象で、彼はやはりそういう風に書いて日常の発音を忠実に写している積りなのである。また発音の訛のようなもの、*bin* (*bien*)、*assoufflée* (*essoufflée*) などこの系列であると教授はいつている。

思うに、小説の表現としてみれば、こうした書き方が、一つ二つならとにかく、いくつも重なってきたときの音の再生と、常とかわった字の形というところから来る効果かどうかという問題なのである。

㊦ 省略形 (Formes elliptiques)

ある音 (*son*) や、音綴 (*syllabes*) は日常会話でほとんど発音されていないことがある。併し文字で書くときは誰もがそのまま書いておくのに、Queneau は文字の上でまでそれを落し

てしまう。そのように落した方が、そういうさいの発音を、より忠実に写しているとするのである。

1) Eの弱いもの、たとえば脱落性のE (E caduc)と呼ばれる弱いEは、会話のさい、発音上落ちることが屢々あるが、Queneauはそれを文の上からも削ってしまう。そういう書き方である。例えば ptite, jparie, msieu, lméto, jménfous といった書き方である。もっとも、この弱いEの脱落はひじょうに広汎な現象なので、他の作家もこの省略を文字の上で行うこともあるが、そのさい大体省略を示す省略符 (apostrophe) をおいているようである。Queneauはそうしたとき殆んど apostrophe を用いないだけ大胆で、文字も妙な形になる。37年の論文では「この apostrophe を書かないことが重要なのだ。何故ならば apostrophe は過去への未練であり、言語学者に委せておけばよい過去の記念品にすぎない」と極論している。なお、これらは会話だけでなく、少数だが地の文にも用いられている。

2) これ以下はEだけでなく、語群の中での弱い母音か発音上落ちやすくなるのを、文字の上でも落してゆく方法である。分類してゆくと、

- ① 先ず、語の冒頭に来るEをかかないゆき方, Gzact, Gzactement. (Exact, Exactement)
- ② ouをかかない. Vzêtes (vous êtes) ; Vzallez (vous allez)
- ③ oiをかかない. vlà (voilà) 但し、これは最近到着した Robert 辞書(第6巻)にもこの書き方で項目として出ているくらいだから Queneau 独自の書き方とはいえない。

3) 子音の弱いもの、流れやすい音を削る方法。

- ① 流れやすい音 l をかかない. Isra, (Il sera) Immbondit, (il me bondit) croyab, (croyable) possib (, possible) といったかき方。
- ② 同じく、流れやすい r をかかない. auttchose, (autre chose) vott dame (votre dame)
- ③ b をかかない. oscur, (obscur) ostiné (obstiné)
- ④ 非人称の il を全く落してしまうゆき方. Faut sméfier (Il faut se méfier)

Ⅲ 強調手法 (Procédés d'insistance)

これは前の「省略法」のいわば反対である。会話のさい、あるコトバを強めて発音したり、強調したりすることが多いのだが、そうした強調を文の上に忠実にあらわすために、ある文字を重ねたり、加えたり、またコトバの組みかえを行うテクニックで、これには Queneau の文章上の特色がかなり出ているようである。

1) 文字を重ねるなど、また若干の文字の組みかえを行って強調を示す方法。

… la ffine efflorescence de la cuisine ffransouèze

ここでは発音上の強調が、重ねられた、または変形された文字によってあらはされるのである。Léon 教授は、この souèze の綴りは17世紀の Académie Française のとった綴りで、いかにもおどけた効果があるとしているが、それは私にはわからない。ただ、いかにも細部のことだが、ちょっとこの souè は面白い。また、重ねた字の、そこで少しその音が保たれる働きを利用しているのも (ffi と ffra) 面白い。しかもこの文は地の文である。

2) リエゾンを受ける母音に、リエゾンされる子音をさらに重ねるかき方。例えば

… vzêtes zun mélancolique ; I sont bin nonnêtes

など。リエゾンのあることを音の世界からは勿論だが、視覚の方からも強調し、そこにかわった味を出すのである。

さらに彼には、誤ったリエゾン (liaisons fautives) を文字にかいてゆく表現がある。

moi z aussi : boudin zaricos

など。ただし、私はひじょうに通じているわけではないが、これは *pataqués* というものに含まれるらしく、発音上はかなりふつうに行われ、特にパリの下町では一般的のようである。併しそれを文字にかいてしまうことに *Queneau* の特徴があるといえるであろう。1955年に彼は「こうしたリエゾンの誤の前に少しも逡巡しない。コトバの誤りで不毛 (*stérile*) のものはあまりない。いつも寒りかあるものだ。進んでこれらを採りあげてゆきたい」とかいている。また、前に引用した *A. Bergens* は、こうした誤ったリエゾンは口調をよくする子音の一種であるから、こうして文字にかくと文の口調がよくなるはかりでなく、目でみても効果がある、としているが *pataqués* とは字でかけばすべてそんなものであろう。

3) 母音を強調するとき、その母音の前に *H* をつける手法。

たた一字のことだが、珍らしい工夫である。

cést hun choc : Tu vas haller

とかくと、*H* のところで発音上ひといき休止するように読者にもとめているような効果があり、その休止がまた表現力をもっている (*expressif*) と教授はいつている。これも *H aspire* の効果を利用しその通りだろうと思うか、とにかく強い感情を浮彫りにするための表現手段である。なお、この手法は *Flaubert* も稀に用いていることを教授は指摘している。例えば

ce qui s'appelle l'Hamour

faire pohétique など。

なお、前出の *E caduc* をこんどは、ていねいに *Eu* と二字にかいて、とくにそこを強調する表現もある。skeutadittaleur (ce que tu as dit tout à l'heure) という書き方など。但しこれは次にいう *agglutination* ともなる)。

長い文では、que ça te plaise ou que ça neu teu plaiseu pas (...ça ne te plaise pas) など。

このばあい、前の方は実は言い要がなく、あとの方、即ち否定の方に話し手の意欲があるともしえる。

また、*monsieur* を早くいうときは *msieu*、強調するときは *meussieu*、そう現金に作者の期待した通りの効果があるかどうかは別だが、作者の意図はわかるのである。

要約すると、現実に *Queneau* といえども普通の綴字をもったコトバで大部分の文をかいている訳なのだが、それに混って、ときによってはかなり度々、こうした特異な書き方が出てくる。もともとこれらは、彼の流儀でコトバの音を忠実にうつすことを主たるねらいとするものだが、それが反復され、累積されてくると、一般を離れた独特の綴字を目で見ることに、音の世界をそのまま写したはずの独特の音域環境 (*climat sonore*) といったものとか、ひとつの別世界をつくり出して来るといえるであろう。発音上、ある省略や強調が行われる場合があっても、ふつう、作家は本来の文字を用いて、そうした省略や強調を無視して表現し、必要あれば、別の手法を使って、そうした省略や強調が行われていることを表わすのに対し、*Queneau* はとにかくそれらを綴字の面から改めて、いわば文字そのものの上で解決しようとするところに彼の表現の特徴があると思われる。こうした省略形や強調法や、さらに次に述べる *agglutination* などによる奇妙な形をしたコトバがいくつかりはめられている上に、例のコトバのあそびのような、ときには読者に挑み、またはくすぐるような、奇妙な表現が加わって、それらの累積

した総和か、比較的それが成功したときには、ところどころで、たとえば *surréalisme* 派の作品とか、*goyce* の *Ulysses* などと似たといえはいえる、併しあるときはもっとおどけた世界にわれわれを引入れることはあるようである。

Ⅳ 音綴をつづける手法 (Agglutination syllabique)

同一のグループ・リトミック (リズム段落) の中で、その音綴をすべてつづけてしまう現象を *Queneau* はやはり文の上でもつづけて、ひとつの文字にかいてしまうことが、この小説でときどきある。教授はこれを音綴をつづける手法 (*agglutination syllabique*) と呼んでいる。簡単なものは *ltipstu* (*le type se tut*) とか *skeutadittaleur* とかの如きものである。思うにこれまた発音の上では日常ふつうの事であろう。*Queneau* はやはり 1955 年に「仏語はとにかくこうした *agglutination* になり易い傾向にある」とかいつているが、英語なども似たものではないかと思われる。この技法は発音のままを、短縮や省略などを含んで、奇妙な形で、ひといきに一字として書いてゆくのが特徴で、かなり読者を驚かすものであろう。こうした表現が、句のみならず、ひとつの文としていくつかが現われてくるのだから、そういう、引つづけた書き方と、人の動作の速度との間に、新しい結びつきがあると *Léon* 教授はいう。即ち、たとえば

Gzact. Lagoçamilébout (*Exact. La gosse a mis les bouts*)

A boujplu. A boujpludutou (*Elle ne bouge plus. Elle ne bouge plus*)

Imbondit dssus…Isrelève. Ircommence (*Il me bondit dessus…Il se relève. Il recommence.*)

(この項と次の項とは、文字の配置だけが問題なので、邦訳は省く。)

といった風に、ひといきにかかれると、そこに行動の迅速性やときには敏捷さを強調する (*Vivacité accentuée*) と教授はいうのである。これらの文には、短縮や、省略が繰返して行なわれているために、形の面から異様さで読者を驚かすと思うが、音の面からも教授のいうような効果はあるであろう。

綴字法に対する教授の分類は、ほぼ以上で終る。

次に、はじめにいった、彼のコトバの遊びにひとことふれたい。以下その例を、三つ四つあげるが、こういった駄じゃれを含んだコトバがつきつぎに列べられ、読者をくすぐり、作者自体も楽しんでいるようなところがみえる。

(a) *Doukipudonktan* (*D'où qui pue donc tant*).

(b) *caco-calo* (*calembour avec "à l'eau"*)

(c) *le buffet genre hideux* (*Henri Deux*)

(d) *flicmane* (*policeman*)

(e) *le bâille-night* (*by-night*).

(f) *slip-tize* (*strip-tease*)

そしてこの小説に限らずそれが *Queneau* の特徴あるひとつの表現手法なのだが、実は、これは綴字法ほど *Queneau* 独特のものとはいえない。特にさきにいった *goyce* の小説にはこういった例がひじょうに多い。あとに述べる自国語以外のコトバとつなぎ合わす技法も同じである。

ただ次の二つのことは言うておくべきであろう。

① これは当然のことだが、*Queneau* の場合、例の独自の綴字法と混り合って用いられて、

一つの文に特異な綴字とコトバの遊びの両者をいくつかふくむ場合、その文の異様さは益々目立ってくる。この小説の後半、そうした効果はたしかに出ている。

② 外来語系統のコトバ、また英仏混合、ラテン仏語、ラテン語の句はもとより、かなりの長さのそうした文が、今までになく、この小説には多い。

以上の、1②の両方に関連している、ひじょうにはっきりした例を一つあげて見たい。この小説の第1頁は **Doukipudonktan** (前出 a) という字ではじまっている。そのあとは、すぐ、ふつうの文なのだが、冒頭のこの一字だけは、唐突きはまるものであり、内容はすぐわかるが、何としてもこの字の形が異様である。Léon 教授はとくにこの語をとりあげ、フランス語では、**K**の字はあまり用いられず、偶々それか用いられると「外来語」、とくに何となく文明国でない態称 (*allure barbare*) を感じさせるといっているが、そこまで見るかどうかは措いて、例の *agglutination* の効果も加わって、いきなり読者を煙にまこうとする意図、ひとつの *mystification* の効果はたしかに達成されているようである。ただし反面、作者の見えすいた技巧といったものが、いきなり感じられることも否めない。こうしたコトバの意味と関係のないコトバのいじくり方には、だから、作者の考えた効果もあろうが、悪い効果もあろう。

次に、②のことなのだが Léon 教授は「見なれない書き方、聞きなれない音、仏語でない書き方、仏語でない音、そうしたものの混合は、ほんとうのたわごと (*délire verbale*) コトバのためのコトバに酔いしれる状態 (*une griserie*) にわれわれを導く」としている。

特にこの小説には、英語と仏語の混合、駄じゃれをふくむ、そうした混合、または意味もないばかげたコトバが Queneau の今までの小説になく多く用いられ *Zazie* の使うラテン語と英語の混用 (教授はこれを *le latin de cuisine* とする。) またやや *érudition* をきどったラプレー風のラテン語をまじえた表現、街のくつやや酒場の「おうむ」までが使うラテン語などが休みなくでて来る。そしてさきにもいったようにこれらのコトバ、または文が、異様な綴字法とまじって、文の異様さを強めるのである。そうして、それらの総合された効果をとらえて、Léon 教授は漠然とコトバの抒情 (*un lyrisme verbale*) と呼んでいる。はっきりせぬ言ではあるが、ある程度、そうした効果はあるといえそうである。

さて、次にこの小説における独特の綴字法をはじめ、彼一流の突飛な表現のテクニックを、その当時のフランスの文壇はどう受けとったか、その点少し調べて見たのだから、意外なほど内容のあるデータが入手できなくて残念である。私がしらべた範囲でいうと、とにかくこの小説は意外に大きな人気を集めたもようで、(月に5万部出た、とある)彼の久し振りの小説であったし、Queneau に慣れない新しい読者から見れば、珍妙な、しかしいかにも新鮮そうに見える表現のテクニックが魅力といえればひとつの魅力になったのであろうが、その上 *Zazie* というシニクになるがゆえにまたこっけいな少女のもつ魅力、特に小説のはじめの方の活気、伝統的な意味での小説のうまさ、そういったものが一般の好尚に投じたものであろう。文壇の方でも、評論家の方で相当これを買った向があり、特に新進の人々ほどこれを認めたらしく思われるが、一方既成作家の層からは痛烈な批判が出た。その代表的なものとして François Mauriac のそれをあげる。Mauriac は *l'express* 紙上で、この小説の陰気でくどいシニスムはがまんならぬ。またこの小説の珍妙な文体や表現は、著者即ち Queneau が、文体や表現というものに全く絶望してしまっているあらわれではないか。と痛烈に評している。(l'Express, 5 mars 1959) 語学者の Marcel Cohen は *Zazie* についてはないが、一般に Queneau 表現は氣どりがすぎて、ややむりに通俗の調子をとりすぎており、いつも読者にウインクを送っているよ

うなところがある。こうした表現は排けきすべきだ、としている。ポー・ボワールもただひとことだが、この本は評判のいいわりにあまり面白くない。Queneau はいまままでの作品の方がよい、としている。要するに、既成の大家たちからは評判が悪かったようである。

最後に、未熟であるが私見を述べる。(La Fonce de Chose, 第10部) Queneau の表現の中、コトバの遊戯といった面については、彼の特色といってもあまり独創的なものでないので、前に述べた程度とし、主として彼の綴字法による表現について述べたい。

個々のコトバでも、それを小説の形態の一部とみれば、綴り字をかえたコトバ、新しい形のコトバから、新しい主題が生れるということも絶無とはいえぬであろうし、また新しい形態の探求が何らかの新しい相関関係 (relation) を生むということもないとはいえぬ。少なくとも一歩進んだリアリズムを生むことはありうるであろう。

小説というものが、その形態を含めて、すべて変幻自在であってよいという、比較的新しい小説作法の下にあっては、Queneau のような、直接コトバの形態に突っかかるような技巧も許されてよいとは思ふ。

併し、こうした綴字法といった技巧に限っていうと、それは個々の「文字」というあまりにも末端から出発するので、小説といった尠大なコトバの集散である文学形式においては、ある特種の効果をもつとされるそうした文字、またはコトバが相当数用意されなければ、その文の中でのちらし方にもよるが、あまり大きな効果を期待することはできまい。(その意味で、詩のばあいは一寸話が別になる。)それに、彼の新しい綴字法が今のように彼だけの文学上のテクニックになってしまったのは本当は Queneau 本来の志ではなかった筈である。すなわち1937年に彼がこの新しい綴字法をいい出したとき、彼は相当数の人々が彼に従ってそれを用いることを本気で予想していた。さきに引用した彼の言はその到達点 (Point d'arrivée) であると彼自らかいており、彼の予想した未来図 (vision) であった。ところが予想に反し彼のこの技法は今では遙かに孤独な彼だけのコトバ造りになってしまった観がする。

現実の問題として、彼の37年の主張からこの Zazie に至る30年間に、新しい綴字法による、しかもある効果をもったコトバをどれだけ生み得たか。

及ばず乍らではあるが、私見をいわせて貰えば、それを用いたことにより特殊の効果を生むと見られる、そうした新しい綴りのコトバは案外なほど少ないのではないかと思う。単なる文字のおき換え (transposition) のような、発音と関係のないいわば文の「密度」にすぎないようなものも、綴字法の一部をなしており、また省略形の中でも E caduc のようなかなり一般的で、彼の特色の稀薄なものもあり、そうしたものには効果の面から少しく割引きして考えるべきものもあろう。そうしてあとに、前述した省略形と強調形および agglutination の多くが残るが、これらは勿論、その文の中での散らし方にもよるが、ある程度の効果はあげているとはいえよう。併しその効果がどの程度のものかといえ、大いに Queneau を賞讃している側の Olivier de Magny 自体それを trouvaille phonétique といい、また notations charnantes といっているが、それ位の評価がほぼ当たっているのではあるまいか。他のある評論家が、こういった表現は embryons d'expression (表現の胎児) で、あまりにも、捉えどころがなさすぎる (fuyantes) といったが、きひしくいえばそういう評も成立するであろう。但し、異様な綴字と配慮され音感とでかもし出されるひとつの音域環境 (climat sonore), それらのひとつのリズムに加えて、ふざけたコトバのあそびとの混合による lyrisme verbale といったものが、よくも悪くもかもし出されること、つまり二つの特徴あるテクニックの総和の効果は、そう高度のものではなくとも、やはり存在することは是認せねばなるまい。

ところでこれを逆について見よう。この小説の前半、私だけの意見であるか、Zazie という少女のもって来かた、またその話させ方はやや古い在来の小説の立場から見て実にうまくできていると思われる。この人を食った少女は、パリでは何よりも地下鉄を見たがり、丁度それがストライク中で、烈火のごとく腹を立てる。この子の第一に買いたいものはアメリカの作業ズボン、ブルージーン、飲みたいものはコココーラしかない。そういった設定のしかた。そして率直すぎてシニックな少女の会話は実にうまいのだが、後半に比べると、このあたり、独特の「綴字法」もふざけたコトハも、少ししか使われず、かなりふつりの表現法によっているのだから、小説として活気に満ちている。ところが後半になると、いろいろの事件が重なりすぎて、次第に人物の影が薄くなって来るのだから、そうなる、実は例の綴字法をはじめ、特異の表現が頻出してくるにかかわらず、またそうしたものの散発的な面白さはあるにかかわらず、どうも小説はあまり面白くないようである。

これはつまり、やや古い意味での小説づくりのうまさか彼独特の一切の表現のテクニックよりあるいは優先しているしるしではないかと、私は想像するのである。

Queneau は話しコトバによる文学を打立てようとして、しかも小説の形態の最末端であるコトバの綴字をかえるテクニックから出発した。(彼の伝統的な形の小説はもちろん除いて)前にいった通り、詩のような短い形態のものならそうした技術の効果もある程度顕著であるが、小説のような長大な散文にこれを用いると、どうにも散発的になって、いささか無理の多い、爽りの少ないテクニックになるのではないかと思う。逆にいえば小説というもののあまりにも豊かな、その他の技術に優先され勝ちになるのではないかと思う。

Léon 教授は、Queneau が折角早くから提唱した綴字法をあまり熱心に追求しないときもあり、またその綴字法の今までのできばえからいって語学的に秩序を欠き、30年前に予想したほどでないとし、Queneau は若いとき発表した理論の約束を十分果さなかったと、語学者の立場から嘆いているが、それはもっとものことであろう。但し Queneau が果さなかったというよりは、果そうにも難かしかったというのが当たっているであろうと私は思う。

Fleurs Bleues という新しい小説においてもこのテクニックは用いられているようである。私は全巻を読了する暇がなかったのだから、今まで読んだところではこの方面での大きな前進はないように思われる。

(本稿は筆者が、40年10月に大阪大学で開催された仏語・仏文学会で行なった研究発表の全文である)

参 考 文 献

Andrée Bergens : R. Queneau (1963) ; J. Bens : R. Queneau (1962)

J. Queval : Essai sur R. Queneau (1960)

Claude Simonet : Queneau déchiffré (1962)

François Mauriac . Zazie dans le métro, L'Express, 5 mars 1959 (Nouveaux Bloc-Notes).

Raymond Queneau : Zazie dans le métro (1959)

: Bâtons chiffres et Lettres (1950)

Pierre R. Léon (Université de Besançon) : Phonétisme, Graphisme et Zazisme. (Etude de Linguistique Appliquée, Université de Besançon) (publications du centre de Linguistique appliquée)